

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第六部

第三十五章

Guests from Ursae Majoris

峯村 明

リ・コンストラクション

登場人物

35・Guests from Ursae Majoris

329.

330.

331.

332.

333.

334.

335.

336.

あとがき

奥付

登場人物

桧山 健	H&L財団・財務部門勤務
エドミール	ポルタアウレア大公国の皇太子
レディ・ユミコ	エドミールの婚約者
レル・ヴァリス	H&L財団・医療チームのリーダー
ヘルガ	// メンバー
イリチャ	健の息子・真の魂体
バラム	ジャガー
ローカパーラ	世界の守護者
トリポカ	大熊座使節団の団長
テクトリ	トリポカの娘

35・Guests from Ursae Majoris

329.

「ローカパーラだと……」

テレビモニターの前で釘付けになっていた健とエドミールの背後で、老人の声が唸った。アランデル公だった。いつの間にか室内に入ってきて彼らの肩越しに見入っていたらしい。

「父上。その名を、ご存知なのか？」

「名、というか、称号だ。世界の守護者を意味する……なんということだ……」

＊

画面ではそのローカパーラが目を上げて、空を見上げている。「おお。お着きのようだ」

イリチャもつられてローカパーラの目線の先を追う。空にはなにも見えない。何が着いたというのだろう。

「ん？ そなたには見えぬか。少し周波数を下げよう」

すると——空の半分が幾分翳った。陽光を遮って何かが上空から降下してくる。空の半分は翳ったが、上空から降りて来たその物体は鏡のように空の色を映していた。

「——なんなの」

「お客さまだよ」、とローカパーラは言った。彼が「周波数を下げよう」と言ってから、周囲の景色が変わっていた。イリチャの背後には大きな構造物がそびえていた。石と金属の中間のように見える材質でできたそれは、優雅な曲線に囲まれ青みがかっていて、なんともいえず美しかった。

「ほら、そなたのお供が来たぞ」ローカパーラの声は笑いを含んでいる。彼は草原を移動する黒いカゲをみついていた。

「——バラム？」

「このジャガーはバラムという名か」

「え——どうして——」

イリチャの戸惑いも無理はない。黒猫のバラムはジャガーに変身していた。風をまく疾走は速すぎて目が追いつかず、カゲが動いているように見える。勢い余って、ふたりの周囲をぐるりと回り、優雅な足取りでイリチャに近寄ってくる。頭はイリチャの腰のあたりまであって、かつてのジャガー・バラム、そのままだ。

イリチャの隣に身を寄せ、両前足を行儀よく揃えて座り、初対面のローカパーラを見上げる。

「高貴で美しいジャガー。いい子だ、バラム。偵察は済んだかね？」

「あらかた」、とバラムが応じたのでイリチャは腰を抜かしそうになった。

「おまえしゃべれるの!？」

ローカパーラは声をたてて笑っておいてから言った。

「さて、余は客人を出迎えにいかねばならぬ。そなたらもゆるりとするがよい。そうそう、ここでは魂の本当の姿が現れるのだが、到着の客人たちは、そなたらと若干、波長が異なる。よって、そなたらに彼らを見ることができるが、彼らにはそなたらが見えない、ということ覚えておくとい

330.

「あれは大熊座からきた乗り物だ」とバラムは低い声で言った。

「へえ。おまえ、そういう声でしゃべるんだね」

「もっと高い声だそうか？ あれは大熊座からきた乗り物だニャン」

「やめて。低い方が似合ってる。大熊座からきたって？ すると、宇宙船、てやつ？」

「そうらしい」

「ふうん……うあー、話相手がいてよかった！ こんなところでおっぼり出されたら、わけわかんないよ」

「うむ。ここへ着いてからあちこち嗅ぎまわってみたんだが、気がついたか？ どこから入って来たのかわからない」

「……ポータルがないってこと！？」

バラムはうなずいて、もぞもぞと草の中に寝そべった。「困ったぞ、どうやって帰ったらいいんだ？」困ったといいながら、えらく気持ちが良さそうに大口を開けて欠伸をしている。バラムにとっても居心地がいいらしい。

イリチャもジャガーの隣に仰向けに倒れ込んだ。周囲で若々しい草が風に揺れている。「ああ……ずっとこうしていたい……ひよっとして……戻りたくないかも……」

「こら～、寝ちゃだめだぞ～、ケン置いて来ちゃったじゃないか～」

「あ……」

「ケンのこと忘れてたな」

「……大丈夫だよ、自分でなんとかするよ、こどもじゃないんだし。それに、こっちは帰り方がわからないし……」

「これが永遠の昼下がりというやつか……眠るな眠ったら死ぬ……」

「もう死んでるかもしれない……けど……行ってみようバラム。大熊座からのお客ってのを見に行こう」

＊

「父上、ローカパーラとは何者なんです？ 世界の守護者とは？ 神？」

「……それだけの格を、感じる」

「？」

「あの男はおそらく神ではない。しかし人格は神に匹敵する、ということだ」

331.

アドリア海を望む高台で、眩しい陽光にプラチナブロンドをきらきらさせ、レル・ヴァリスとヘルガは潮風に吹かれている。

「古代オリエントには、昔からなんとなく興味はあったんだ」

「レルは子どものころからそんなこと言ってたわねえ」

「ティグリス、ユーフラテス、二つの大河に挟まれた地域メソポタミアに、人類最古の文明が興ったという。とはいえ、僕らの属した文明が滅びた後のことだけだ」

「……………」

「ふしぎな土地ではあるよ。『メソポタミア』はギリシア語だし、そこで興った『シュメール』はアッカド語、シュメール人自身は自分たちを『キエンギ』と呼んでいた。そもそもシュメール人がどこから来た何者なのかわからない。シュメール語に似た言語がどこにもない。じつはシュメール文明に先行することおよそ二千年、ウバイドという文明があるんだが、これがシュメール以上にわからない」

「ウバイド文化といえば、アレね」

「そう、ウバイド文化といえば、衝撃的なアレだ。直立するリザードマン。体は人間だけど、頭部はヘビかトカゲをありありと思わせる。おどろくほど写實的に作られてる。崇拝の対象、神さまだったと考えて間違いないだろうね。すると、シュメールの神話に出てくる神さまエンリルとかエンキの一族もこういう姿をしてたんだらうってことになる。

彼らがどこから来たのかわからないが、エンリルは天空神(父)と地母神(母)との間に生まれたという。やがて母である地母神を自分のものにし、替わって地上界の支配者になった。この二名の間に神さまたちの重労働を肩代わりさせるための人間が生まれた。人間の誕生にはほかにも諸説あるんだが、どれにもエンリルが関わっている。つまり、エンリルの背後には天地開闢と人類創造があるんだ。

神さまたちは集まっていろんなことを会議にかけたんだが、決定権はエンリルひとりが握ってた。それに、人間界を統治する秩序も握り、統治者を決めるのもエンリルだった。エンリルが「うん」と言えば王さまが決まるというわけさ。

エンリルの任命を受けることで、各都市の王や統治者はその正当性を示すことができるから、王に敵対することは、すなわちエンリルに敵対することで、敵対者は大いなる秩序の破壊者としてみなされた。秩序の破壊者を討つことも当時の王たちの務めで、多くの侵略戦争はエンリルの名の下で行われた。

親子とも兄弟とも言われるエンキが時々とりなしてはいたものの、エンリルはたいへんな激情家で恐ろしい神さまだったらしい。もう絶対権力者、最高神だ」

「我は神である」

「うん。そう呼ぶしかない。トカゲの神さまだ」

332.

「だから——ミクトランのテクトリが、自分の立場を確立したいがために、冥界王の子であるイリチヤを欲したんだ、と聞いたとき、僕は違和感を覚えたんだ。はたして、テクトリと冥界王との関係は有効なんだろうか、とね」

「冥界王は、恐るべき力の持ち主だと聞いたけど」

「たしかに。だけど、テクトリは一度、冥界王に切り捨てられてるんだぜ。勝手に巨人族を創って地上にばら撒いてたのがバレて、冥界王を激怒させたんだ。恐ろしいくらい怒り狂ってるのがわかって、体がすくんだと、イリチヤがいったっけ」

「あのイリチヤがねえ」

「うん、つまり、テクトリは、修復できないくらい、決定的に冥界王を怒らせてしまった、ということだよ。自分からそんな関係にしてしまった相手に、いってみれば、後ろ盾を要求できるものなのかね」

「……私たちが想像できないくらい、恥しらずなのかもよ、そのテクトリさんてひと」

「うーん。それとも、立場が逆転してしまって、冥界王は名ばかりの冥界王、なのかもしれない」

こんなところで気持ちよく潮風に吹かれながら、あれこれ考えても始まらないけど、とレルは言い、ふっと息をついてひと区切りつけた。

「話は最初に戻るけど、僕が古代オリエントに興味を持ったのには訳がある。この地域はなぜか、紛争が絶えない、災害が多い。よって、死傷者がでる。医者が必要になる」

「まさか——シュメールの神話と関係がある、なんていうんじゃないでしょうね——」

「あり得ないことじゃないでしょ。メソアメリカはコンキスタドールがいろんな重要情報を徹底的に壊してしまったせいで、なんにも検証できなくなってるけど、H&L、ポルタアウレア、どちらも二万年前のあのあたりから話は続いてるんだ。

一方、シュメールはわずかながら検証できる。文明の初期に君臨した者が異常な力を持った、おそらくトカゲだということもわかってる。彼の力は今もこの世界に及んでいる。巧妙に紛争を起こし、地震を起こしている。そして、もっと、ほかにも——」

「ええ。レル」、とヘルガは髪をかき上げ、目を細めた。「もっと、重大で、根本的なこと——ひとを上下にわけ、分断し、互いに争わせようとする。人間はひとえに、神に仕えるための、神の奴隷だから」

大熊座からのお客たちは、鳥だった。人間の体、二本足で歩き、両手は翼、短いマントを着用し、マントの下から尾羽が突き出ている。頭部は鳥だった。つまり、インコの頭を持った者はインコの翼と尾羽を持って二本足で歩き、ワシの頭を持った者は鷲の翼と尾羽を持って二本足で歩いている。ニワトリもカモもいれば、カワセミもキジもいた。ほかにも名前も知らない鳥たちがたくさん。全部で四、五十人、いや四、五十羽といったところか。

(大熊座じゃなくて、鳥座?)イリチャがこっそりささやくと、

バラムは返した。(よかったよ。クマじゃなくて)

クマじゃなくてよかったとはいえ、私語を交わしている彼らは、ピチュピチュギャアギャアケケケとかまびすしい。貸切バスから降りた団体旅行客が、目的地に到着して、口々に旅の感想や現地を評している、ように見える。翼の動きは手振りなのだろうが、羽毛が舞い上がって、なにげに埃っぽい。バラムはあからさまに鼻に皺をよせて歯を剥いている。

(バラム、飛びかかって喰いついちゃだめだよ)

(私には理性と好みがある。どんなに空腹でも口に合わないフードは決して食べない! どんなに高価でも食べられないものは食べない! たとえ据え膳であっても!)

(.....ん? すえぞんて、何?)

(.....なんでもない! 子供が知らんでよいことだ!)

(ふーん、帰ったら健に訊いてみよう)

(いや、バイスロイの方がよく知っ.....おっと、ごによごによ。それより、見ろ。あれを)

云われて見れば、到着ロビーの入国口反対側から出迎え係がやって来た。服を着たミミズクが服を着たカラスを従えている。

(——テクトリ?)(——ベネトナシュ?)

グラマラスなミミズクはさっそうと歩を進める。カツカツという足音は足の爪音ではなくて、ハイヒールを履いてるからだ。イリチャとバラムはあぜんとした顔で見合う。後に続くカラスはどことなく卑屈で、みるからに"ベネトナシュ"である。

やがてミミズク女は立ち止まり、満面に笑みを浮かべた顔で言った。
「みなさま！ 遠路はるばるようこそ！ ささ、主(あるじ)がお待ちかねでございます」

テクトリとベネトナシュとは、お客をもてなす側にいるのだった。

334.

当初健とエドミールだけだったその部屋にアランデル公が加わり、そこへひろがマルガリータ公妃の車椅子を押してやってきて、健たちが立ちっぱなしなのを見たユミコは椅子の調達に駆けまわっていた。さらにレル・ヴァリス、ヘルガも加わって、いっきょに十人近いメンバーがモニターに見入っていた。

そして画面の中に、あのローカパーラなる男が現れると、人々ならぬ鳥々は静まり返った。最前までのピーちくぱーちくの大喧騒がウソのようである。彼らにとってもローカパーラの存在感は特別なものらしい。それとも、ローカパーラには大熊座の鳥々に特別な影響力があるのだろうか。

ローカパーラはなにげない立ち姿で「みなさん、ようこそ」から始まって、歓迎の言葉を述べている。心地よい響きの言語が彼の口から発せられると、到着ロビーの広い空間が、うわん、と鳴った。ほんの挨拶なのに、彼の声は特殊な響きを具えていた。

一声で人を魅了する声だ、エドミールはそう考えていた。
もちろん声は発声方法やトレーニングで変えられる。しかし非物理的な振動を持ち、多次元に影響を及ぼして人の心をとらえ、人によっては心ごと発生源と共鳴を起こしてしまうという、奇跡的な声の持ち主がいる。このローカパーラのように。

そしてエドミールはひそかにうめいた。メルノの声に似ているのだ。

メルノがかつてのメッサナで標的にされた訳を、バイスロイもエドミールも知らない。たぶん、メルノ本人も知らないだろう。ただ彼女の歌の力による影響力に原因があるのではないかと、漠然と推測されるだけだった。

しかし、今、いきなりその答えがわかった。メルノもローカパーラも同質の声を持っていたのだということが。

ローカパーラが、おのれと同じ力を有する声を見つけたとしたら――

健も、エドミールも、確信していた。このローカパーラという天使のような男は、のちの――

メルノの声は、冥界王と同じ力を有していた。それゆえに、彼女は残酷な方法で排除されたのだ。

335.

波長域の違いで、イリチヤ達には鳥人間が見えるが、その逆はない。ローカパーラはそう言っていたが本当だった。イリチヤとバラムが鳥たちのただ中にいても誰も気がつかないのである。そして、どうなっているのか、さえずりや鳴き声は人間の言葉に翻訳されて、意味をもって人間の耳に届いた。その会話の内容から、彼ら鳥たちは定期的にこの世界を訪れている使節団だということがわかった。そして、団長はトリポカという名だった。見た目はミミズクである。

「以前、寄らせてもらった時と、大違いですなあ。ローカパーラどのにはさぞかしお心を傷めておいででしょう」と、慈悲深い態度でホストのローカパーラに話しかけている。

「瞬く間の出来事でした。いたるところで火山が噴火し、地が裂けた。噴火物が空を覆い、やがて雨が降り出し、豪雨は今も治まらない。多くの生き物が火に追われ、水に飲まれ、海中に消えました……」

時は今でいう白亜紀。気温は現在よりも10度以上高く、海水面は現在よりも100mから200mも高かった。無論、陸地の形も様相も今とはまるっきり異なる。

「このような大掛かりな異変は定期的には起こり、そのたびに生物が死に絶え、新たな生物が生まれます。この生物の入れ替わりには、これまで、数百万年かかるのが通例でした。しかし此度はそうはいかないようです」

「と、仰せられますと？」

なにかが違うようだ、とローカパーラは呟いた。

「はあ……？」

「肌で感じるのです。これまでと違う、なにかが起きる」

「ローカパーラどの、そのなにかとは、あらたな文明？ 爬虫類に替わる、新たな種？」

さあ……とローカパーラは微笑む。「こう言うてはなんだが、ここだけの話……」

「ご安心ください。私と貴殿の、長いつきあいではありませんか」

「かたじけなく、トリポカどの。こう言うてはなんだが、爬虫類の天下は少々長すぎた。彼らは粗雑で、猛々しく、優美なところがひとつもなかった。なにかにつけて自分らの力を誇示し、相手を威圧し、恐怖させ、問題を力で解決するのがお決まりだった。そうあるべきではなかったのに」

「いやいや、爬虫類と対話など不可能というもの。そんなことは赤子でも知っておりますぞ」

「私はひとえに"この世界の主人"を護る者。生命はやって来て、生き、そして去って行く。私はその証人として存在するだけ。その枠から踏み出すことは許されない。私はただそう"在る"のみ」

「——お疲れのご様子ですな——」

トリポカは眉をひそめるような、物思わし気な面持ちでローカパーラを見やった。

「ははは。この仕事に就いて永いですから。それでもときおり、このように休憩ともいえる時が巡ってきます」

「いやその、失礼ながら、貴殿、おきさきは？」

「おります。つねに、十名ほど」

「おお……して、お世継ぎは？」

「世継ぎ？ 私を継ぐ者？ そういえば、おりませんね」

「そうでしたか！ 世の中にはすべて後継者に託して、引退する、という手があるのですぞ、そういうお考えはござらんのか？」

「ええ、まあ、世継ぎというものを持ったことがないので」

「……………」

336.

「娘よ！ テクトリ！ ここにおったか！」

トリポカは翼をばたつかせながら娘のもとへ走った。娘は化粧直しをしているところだった。鏡に向かってくちばしの先端に口紅をさし、まつげを足した目をぱちぱちさせている。

「どうなさったの、お父さま、ローカパーラさまとのお話は済みまして？」

「うむ、まあな。ところで娘よ、あのお方のおきさきさまというのはどうなっておるのだ！？」

テクトリは、ああ、と興味なさそうな風情で答えた。「いつも十人くらいのきれいどころが侍ってるわよ、どうなってるのか知らないけど、入れ替わり立ち替わり、百年でひとりくらいの割合かしら、出入りがあるのよ。どっかから派遣されてくるんじゃない？」

「くるんじゃない？ って、のんきな！ おまえはどうなんだ！？」

無言で振り向いたテクトリ、間をおいて、「はあ？」と頓狂な声を出した。「なにとぼけたこと言ってるのよ、父さんたらさ！ あたしは鳥人間。あのお方とは種が違うじゃん」と、どんどん言葉遣いが碎けてくる。

「いやあのな、おまえの気持ちはどうなんだ？ それを聞いてるんだ、私のお供でここへ来て、あのお方に一目惚れして、残る！ とごねて幾星霜、この間に、その、なんにもなかったのか！？」

「あるわけないじゃない、種が違うんだもん。あたしはあのお方のそばでお顔をながめてれば幸せなの！」

トリポカのミミズクの面に『信じられない』という言葉が貼りついていて、「おまえ——本気か——？」

「ええ？ 本気もなにも、なにをどうしろっての？」

トリポカは周囲をきょろきょろと見回して誰もいないのを確かめ、声をひそめて言った。
「今からでも遅くない！ テクトリよ、あのお方にアタックするのだ！！」

「なに、アタックって？ いつの時代の言葉よ、昭和？ わかるように言ってよ」

「ええい、誘惑して落とすのだ！ もっと即物的に言うと、仲良くなって子どもを産め！！」

「え」

「種の違い？ そんなものどうにでもなる！ おまえが望みさえすれば、どうにでもなる！！」

あとがき

『Guests from Ursae Majoris』＝『大熊座からの訪問者』

使節団長、トリポカ氏の名前は、アステカ神話の神さまで大熊座の神さまであるテスカトリポカから。トリがポカしたというんではありません。

けど、そうなんですよ、大熊座から神さまが来たというのは根も葉もないでっち上げではないのです。アステカ神話ではそうなってる。

ところで、今回はちょっとですね、不用意なことをしてしまいました。ナニをしたかという、サ○ンに手を出してしまったのです。創作されてる方はご存知かと思いますが、『不用意に○タンなるものに手を出してはいけない』という不文律があるのですよ。筆者は何度か破った経験がありまして、きまってひどい目に遭います。もうお先真っ暗、視界ゼロ、体調最悪、ベネさんじゃないけど、陽の光が鬱陶しい、なんにもしたくない、というか、気力が無くて、できない。もう書ける気がしない、こっそりばっくれてしまおうと、このような状態に陥ります。

書く作業が乗ってる時は読書ができない（筆者だけか？）ものですが、とにかく気分転換せにゃならんと、蔵書を引っ張り出しては投げ出し、これらの本から何年もかけて作った資料をひっくり返して（HTML化してある）タグの修正に手をつけてすぐに飽き、それでも、と思って、某amazonで注文した本を開いてみた。これが『110の種族と未知なる銀河コミュニティへの招待』という本でして。

神智学の文献には過去の文明の時代に太陽系内の諸惑星や、シリウスやオリオンなどからの支援（だか、干渉）があったことが書かれていますが、どうも実際はひじょうに複雑……まあ、これは『宇宙船七月号』向きなので、現在執筆中のとは距離をおくつもりですが、足掛かりにはなったかな。

minemura 晴れてここにふっかつ～、かどうかわかりませんが、とにかく、第三十五章はどうにかりました！

2025年11月16日 記

奥付

リ・コンストラクション

第三十五章 [Guests from Ursae Majoris](#)

2025年11月20日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[freepik](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社